

『個を解放する教育が北欧にある』

社団法人北方圏センター調査研究出版部参事 山田 寿彦 (やまだ・としひこ)



略歴 : 1960年函館市生まれ。早稲田大学教育学部卒。1985年毎日新聞社入社。2000年、「旧石器発掘捏造」取材班キャップ。取材班は2001年、日本新聞協会賞、第1回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞、菊池寛賞受賞。北海道支社報道部デスク、東京本社代表室委員を経て2009年4月から現職。

毎日新聞労働組合の副委員長をしていた13年前、印刷部門の別会社化が労使間の大きな懸案になっていた。別会社への転籍を迫られた印刷職場の組合員が会社側に苦しい思いのたけを訴える団体交渉が持たれた。

組合員が「なぜ私たちの職場だけがこのような目に遭うのか」と切々と訴えている時、会社側の労務担当役員は横を向いて煙草を吸っている。その態度に腹が立ち、「あなたの態度は礼を失している」と指摘した。役員は烈火のごとく怒り、「俺はちゃんと話を聞いている。君の方こそ失敬じゃないか」と反論した。役員はプライドを傷つけられたと思ったのだろう。団交が終わった後も、私の発言に怒りをぶちまけていたらしい。正直に振り返ると、役員に面と向かって言った時、胃がしびれるような激しいストレスを感じたことを覚えている。

日本の社会には会議のような場で本音を言うことがはばかれる空気がある。下手に言うともう少し大人になれ」「平場で言うことか」などとたしなめられる。空気を読んで当たり障りのない発言でお茶を濁し、本音は飲み屋でというのが不文律である。

「物言えば唇寒し」の思考態度は学校で叩き込まれるのではないだろうか。自我が強くなり始める中学生になると、問答無用で校則に縛られる。服装や髪型規制は、規格からはみ出す子供を見つけて押さえつけることを目的としているかのようだ。抗うよりも順応・適応する生き方を教え込まれる。

このように個を徹底的に閉じ込めるのが日本の教育だとすれば、対照的に個を解放する教育がフィンランドにあることを高橋絵里香さんの留学体験記「青い光が見えたから」(講談社)に教えられた。高橋さんは4年間の高校留学生活で自己が解放されていく喜びを綴っている。自己の解放とは自分らしさを発見することであり、勉強はその手段であって教師はサポート役である。そこから「勉強は楽しい」という感覚が生まれてくる。

北欧諸国が高福祉国家という社会的コンセンサスを作り上げていけた背景に、社会が持つ「議論する力」を感じる。力の源泉が教育にあることは間違いないだろう。

旭川市での中学時代、目の前の暴力教師に何も言えなかったという高橋さんの内的葛藤は私にも思い当たる経験がある。日本の学校の息苦しさは日本社会の息苦しさそのものだ。フィンランドとの比較を「文化の違い」論に矮小化させるべきではない。個を閉じ込めた人間集団(組織)は時に暴走するからだ。

旧海軍の元幹部たちが敗戦の教訓を未来に残そうと開いていた反省会の記録テープが約400時間分見つかったというNHKのドキュメンタリー番組が先日放送された。その場その場で言うべきことを言えなかった高級将校・将官たちの懺悔録だ。小さな誤りが積み重なり、大きな誤りへのうねりが作り出されていった歴史の教訓である。

「個を閉じ込める教育」がある限り、自由な意見表明を萎縮させる日本の文化は克服されない。日本が戦争の過ちを繰り返す芽も社会から根絶されない。政権を取った民主党が教育改革に本気で取り組むのなら、「個を解放する教育」へと舵を大きく切ってほしい。フィンランドの教育は羅針盤である。